

ジャングル入植地の 子供たちを教える

～マレーシアからの報告～



中田 洋子(青年海外協力隊員)

ふるさと熊本の皆さん、アパ・カパール。(マレー語で「気嫌いかか」)ここは緑輝く南の国マレーシアです。早いもので、こちらに来て一年半が過ぎました。

朝、コラン(イスラム教のお祈り)の声を覚ますとき、「ああ、ここはマレーシアなんだ」と気付くほど、最近では、こちらの生活に馴染んでしまいました。

船乗りだった父から聞かされる外国の話に、夢をふくらませて育った私は、保育園に就職した後も、「自分の仕事を少しでも開発途上国で役立てたい」という希望が抑えられず両親の心配をよそに、青年海外協力隊に参加したのでした。

保育園でのわずか四年間の経験だけで、「幼稚園教諭へのアドバイザー」という肩書きには、いささか照れくさい感じもしました。案の定、こちらでは教えることよりも、教えられることが多いくらいです。

開発途上国といっても、マレーシアはすでに中進国と呼ばれる程の急

成長を遂げています。一見すると日本かしらと思いたくなる首都クアラルンプール。しかし、車で郊外へ出ると、うっそうとしたジャングルが延々と続きます。

私は、このジャングルの中のスルティンという入植地の幼稚園で働いています。入植者が入ってわずか三年目で、スタッフハウスを除くと、まだ水道も電気も整っていません。

でも、マレー人たちは、それがあるがままに受け入れ、人生を楽しみ、イスラム教の神、アラアを信じ、満たされた気持ちで毎日を暮らしているのです。

子供たちも皆さ負けに負けることなく元気いっぱいです。幼稚園では、子供たちにイスラム教のお話を聞かせたり、ボールやフラフープを使って遊ばせたりといった具合で、施設に差はあるものの、日本の園児たちと全く同じような勉強をさせています。もともと、子供たちが一番嬉しそうな顔をしてくれるのは、十時のおやつの時、この時ばかりはどこでも子供は一緒



教室で子供たちと

だなどつくづく感じます。

入植地開拓に励む家族の子供たちを育てるということは大変な仕事だと思ふ反面、子供たちの元気な姿にこちらが逆に勇気づけられること

とここで、熊本の皆さんは、マレー料理を食べたことがありますが、暑い国ですから、料理にも食欲を落

しなす。私も、私どもの会社は小さいながらも、アメリカのロッキード社のデータロギングというデータベースとコンピュータとを接続して、数億という情報が検索できます。東京の会社から我が社に情報を問い合わせることもよくあります。要は、情報のアンテナをはるかどうかという意欲の問題です。

私はアメリカのコンピュータ会社を何回か視察してまわりましたが、アメリカではコンピュータの研究開発会社はほとんど郊外へ移転しています。理由は、研究開発の仕事は都市部より、環境の良い郊外で行う方がはるかに効果があるからです。これは各種のデータで裏づけられています。熊本県でいえば阿蘇周辺が最適の場所だと思います。コンピュータ関係の仕事は非常に論理的な考え方が必要です。これは東洋的思考とはなじまない部分ですが、阿蘇は自然環境が良いだけでなく、欧米風の景色も備えており、人が論理的な仕事をするのに向いていると思います。

テクノポリス構想の森」では、研究開発型の企業が阿蘇の大自然の

とさない工夫が必要で、食生活の知恵として生まれたものに、チリ・ソースがあります。赴任当初、これをふんだんに使った料理はとても辛くて食べられなかったのですが、今では大好物になりました。この味に慣れると、日本に帰ったとき、味付がもとの足りなくなるのではないかと心配になってきました。

反対に甘いことこの上ないのが、コーヒー、紅茶の類。かき回しても溶けきれずに、なんとコーヒー茶碗の底にお砂糖が沈殿しているんです。

また、マレーシアは、トロピカルフルーツの宝庫でもあります。果物の王者ドリアンをはじめ、パイナップル、マンゴ、ランブータン、ライチ……どれもこれも初めて味わうものばかりで、その種類の多さには驚かされます。

ぜひ一度、マレーシアへ遊びにいらしてください。オレンジ色の太陽とコナツ色の風がお出迎いですよ。



体操の時間

情報と人材を集めて、 感度の高いソフトの森へ。



現在、県内で活躍するコンピュータのソフト開発会社はおよそ三十社。私も、その一会社の経営者として、ソフトの研究開発に取り組んできました。いわゆるベンチャー企業を設立して既に五年を経過したわけですが、実際に仕事を始めて、第一次ベンチャーの時代は終わったのではないかと気がします。たとえば「中学生がパソコンゲームを考案して一千万円も上げた」とか、「大学生が学生企業で年収何千万円を得ている」とかといった景気のいい話は今はあまりでてこないのではないのでしょうか。コンピュータゲーム一つをとってみても、現在のよう

いろいろな種類が氾濫してくると、他との比較が当然厳しくなってくる。お客さんを喜ばせるゲームを開発しようとするには最低一億円はかかると思われるくらいです。こうした場合の中で、各ベンチャー企業は自社の資金面、人材面での弱点を他企業との提携により補完していかないと生き残れないという危機感を持ち始めているようです。ところで、熊本県はIC産業が盛んで、出荷量も急激に伸びてきています。IC産業があるから、コンピ

ュータをつくり、ソフトを開発したりするのは有利だと言いますが、これは間違いです。どんなに小さなコンピュータでも、一つ作るのに数百種類のICを必要とします。そんなに多くの種類のICを県内で全て賄うわけではないので、ICが作られているから、その応用製品を作るのに適すると短絡的に考えるのは危険です。同様にソフトウェアを開発するのに向くと結びつけるのも危険です。

テクノポリスや情報資源都市の問題にしても県民が基本的な認識を共有することが重要です。テクノポリスはどこからくるものでもありません。県民のニーズによってつくりあげるものです。各業種の人々が情報のアンテナを伸ばし、テクノポリスに常に関心をもつていけば、そこに自分たちに有益なものが必ずみつかるはず。そして計画に積極的に参画し、発言する。自分たちのカラーをテクノポリスに反映させるような努力をしたいと思います。

また、情報面で、熊本は地方ゆえに中央に劣ると考えがちですが、決して悲観的に考えなくてもよいと思

ふもとに結集する計画のようですが、それと同時に、工芸家やデザイナーといった感性のすぐれた人々を招くことで、コンピュータの応用分野がぐんと広がるような森にしていきたいものです。

昭和二十六年 熊本生まれ
昭和五十年 福岡工業大学工学部電子工学科入学、在学中、工務部部長
昭和五十九年 熊本デジタルデザインシステムズに社名変更

なお、デジタルデザインシステムズとは、世の中のすべての現象をデジタル(記号化)しようとするコンピュータ情報の最小単位、ビット(1か0か)という表現の組み合わせで表現してみようというチャレンジ精神を社名化したもの。

●ソフトの森
ソフトウェアハウス、研究所、図書館、シンクタンク(頭脳集団)、計算センター、データバンク(情報銀行などを緑豊かな森の中に集めようという計画、熊本テクノポリス計画の一つ)

デジタルデザインシステムズ社長
永井 明

